



退任する都倉長官(写真:文化庁提供)

職員から花束を受け取り笑顔で退任する都倉長官(写真:文化庁提供)

この5年間は本当に忘れ得ない貴重な経験で、退任するにあたって一言で申し上げるとするならば『感謝』。感謝しかございません。本当にありがとうございます」

都倉文化庁長官 退任あいさつ 5年間振り返り「感謝しかない」

文化庁では3月27日、文化庁京都庁舎において、最後の京都庁舎出勤日を迎えた都倉俊一長官による退任あいさつが行われた。

都倉長官は令和3年4月の就任以降5年にわたり、コロナ禍における文化芸術活動の振興、文化庁の京都移転、CBX、文化庁と自治体・産業界との連携、食文化・文化観光の推進など、文化行政の充実・発展に尽力してきた。職員に向けた退任あいさつでは、これまでを振り返り、職員への感謝を述べた。その後行われたぶら下がり取材では、伊藤学司新文化庁長官へ「文化庁のテリトリーが増え、職員の皆さんにプレッシャーがのしかかっている。ぜひ組織改革を行っていただきたい」と期待を示したほか、京都生活を振り返って

「さびしい限り。京都に来るときは『京都のいけずに気をつけろ』と言われたが、結論から言うと京都の愛に包まれて帰ることになる。私の人生において京都とご縁ができたことは非常にうれしい」と述べた。

都倉長官のあいさつ概要は次の通り。

「長くて短い、どちらかわからない5年間でした。コロナ禍真ただ中に就任して、いろんなハードルをくぐって、ようやく気がついた時には京都移転という大きな仕事をしなければならぬということ、基本的には毎日毎日、一生懸命走ってきたつもりです。霞が関素人の私が、今日このように無事に退任を迎えられましたのは、何といたっても職員の皆さまのご協力あってこそです。組織の長は初めての経験で、いろんなプロジェクトで、いろんな人とお付き合いしてきましたけど、人と人とがそれぞれの感情で、あるいは人情で触れ合って、そして作っていく。こういう人と人の出会いがものを生んでいくんだと思います。また、一人一人が仕事を一生懸命に責任をもって前に進んでいるんだという、それが合わさって、色々な難しい問題、一番大きな京都移転を成し遂げたのも、皆さんの努力あってのこと、その上に私は乗って今日まで来たわけですよ。」

文科省出身者として16年ぶりの文化庁長官

伊藤新長官、前長官の方針引き継ぎ取組実行へ意欲

文化庁長官に就任した伊藤学司氏(58)が4月1日、京都市上京区の京都庁舎で就任あいさつを行った。

伊藤氏は1991年に旧文部省入省。東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会CFO・企画財務局長や高等教育局長を歴任し、昨年7月より文化庁次長を務めていた。なお、文部科学省行政官出身の長官は玉井日出夫氏以来16年ぶりとなる。職員に向けた就任あいさつで、伊藤長官は「都倉前長官に示していた大きな方針を、私は行政官出身の長官として実行しながら成果を上げていきたい」と力強く述べた。

その後行われた取材では、特に力を入れたこととして国立劇場の再開場を挙げ、「確実に軌道に乗せなければならぬ。単に劇場をつくるということだけでなく、まさに我が国の伝統芸能の拠点、人材育成を含めて非常に大きな拠点なので、先頭を切って取り組



職員に向け意気込みを語る
伊藤長官(写真:文化庁提供)

んでいく」と述べた。

伊藤長官のあいさつ概要は次の通り。

「今日、都倉前長官の後を受け、24代目の長官に就任しました。都倉前長官に示していた大きな方針を、行政官出身の長官として実行しながら成果を上げていきたいと思えます。加えて、私は35年間、文部省、文部科学省で働いてきましたので、それぞれの課で皆さんがどんな仕事をしているのか、どんな苦労をしながら日々の業務をしているのかということを十分承知しているつもりです。今『働き方改革』と言われていますが、文化庁はどんな所掌が広くなっており、皆さんの仕事は日々、意識をして改革をしていかなければどんどん増えていってしまいます。業務の効率化を進めながら、それでいてしっかりと成果を出していく。難しいことですが、二兎を追っていきたいと思っていますので、皆さんと力を合わせていければと思います。

もう一点、(文化庁は庁舎が東京と京都)二つに分かれているので、『一つの文化庁』という形で取組を進めるには、少し難しい点が出てくるのかもしれない。ただ、文化庁は一つです。やはり文化は全体として相互に関連しながら、新しいものを為し、そして古いものをしっかりと継承していくことが大事です。庁舎は二つに分かれていますので、それぞれの庁舎にあること、働くことによって、いろんな気づきがあると思えますので、相互に共有してもらい、全国の文化振興のためにいい仕事ができるばと思っております」